

2021年12月11日

待降節第三主日

菊地功大司教 メッセージ

パウロはフィリピの教会への手紙で、主はすぐ近くにおられるのだから、「主において常に喜びなさい」と諭します。

ゼファニヤの預言も、「イスラエルの王なる主はお前の中におられる」と告げて、主が共にいてくださることの喜びを告げます。

ルカ福音は、救い主を待ち望む民が、力強く真理をあかしする荒れ野の声である洗礼者ヨハネに、期待を寄せる姿が記されています。それに対してヨハネは、自らの先駆者としての立場を明らかにし、さらに偉大な方が来られるという希望を告げます。

待降節第三主日は、神が共にいてくださることによって生み出される喜びが大きなテーマとなっています。主はどこにおられるのでしょうか。

今年11月14日の貧しい人のための世界祈願日にあたって出されたメッセージで、教皇様は次のように指摘されています。

「イエスが明かしてくださる神のみ顔は、実は、貧しい人に向けておられる御父のみ顔、貧しい人に寄り添う御父のみ顔なのです。イエスのすべてのわざが、貧困は運命によるものではなく、わたしたちの中にイエスがおられることの具体的なしるしだということを示しています」

その上で教皇様は、わたしたちは「(貧しい人の)うちにキリストを見いだし、その代弁者となり、さらに彼らの友となって、耳を傾け理解し、彼らを通して神が伝えようと望んでおられる不思議な知恵を受け取るよう招かれているのです」と指摘されています。

教会は今、シノドスの歩みを共有しています。「シノド斯的教会は、福音を告げながら、

「ともに旅をする』」神の民です（準備文書）。ひとつの神の民として、ともに歩んでいることを自覚しようとするとき、私たちは、その神の民とは一体誰なのかをあらためて認識するように招かれています。

シノドスの準備文書には、振り返りの手引きとしての質問がいくつか掲載されていますが、その最初には、こう記されています。

「教会でも社会でも、わたしたちは同じ道を並んで進んでいます。皆さんの地方教会では、「ともに旅をする」のは誰ですか。「わたしたちの教会」というとき、誰がその一部でしょう。誰がわたしたちとともに旅をするように頼んでいるのでしょうか。教会の枠の外にいる人たちも含めて、道行く友は誰ですか。明示的に、あるいは事実上、どういう人、グループが周縁部に取り残されているのでしょうか」（準備文書）

そもそも私たちは、一緒になって歩みをともにしていると感じる教会でしょうか。教会は、単なる秘跡の分配所ではありません。ともに秘跡にあずかる共同体です。

「私たちの教会」には主が現存しておられるのでしょうか。わたしたちは何によって共同体へと招かれているのでしょうか。近くにおられる主を探し求めましょう。助けを求め、支えを求め、忘れ去られた人のうちに現存される主を探し求めましょう。主の招きに応じて、主の現存を感じる時、わたしたちは信仰の喜びに満たされます。互いに支え合い連帯するとき、わたしたちはそこに現存される主によって生かされ、命を生きる希望をいただきます。

教会は生きています。神の民は常に旅を続け、救いの完成の時を目指して歩み続ける民です。ともに旅する共同体の中で、ともに歩む主に導かれて、霊的に成長してまいりましょう。